

化したで……”)、スカシタゴボウ (“islandica はアイランドの意味で……”) など。

最後に本書に収録されていないが北海道東部に産する水草を、私の気付いた範囲で挙げておく。カラフトグワイ、イヌイトモ、フトヒルムシロ (知床)、チトセバイカモ (根室)、オオバイカモ (新種)。

○『福島県植物誌』(福島県植物誌編さん委員会、昭和62年12月、481頁、頒価7000円)

福島県は岩手県につぐ日本第2位の広い面積を有する県であり、植生の上でもフローラの面でも太平洋側、日本海側双方の要素を含む広がりをもっている。それだけに福島県の植物相が詳しく説明されることは日本の植物地理全体を見渡す上でもきわめて意義深いことと言えるであろう。それだけに、この植物誌の完成は待ち望まれるものであった。

カラー16頁、白黒48頁の写真につづき、植物研究史、気候、地形と地質、植生、植物区系、植物目録—と福島県のフローラの成り立ちを理解するために必要な解説と研究成果が、本書の主体をなす。植物区系のところでは同県固有種の水草であるジャッコイの発見の経緯が詳しく紹介されている。植物目録は、“一部信頼のおける文献”よりの引用もあるが、他は全て標本にもとづいたもの。既報告の種でも標本の所在のはっきりしないものは「目録から除外した植物」としてまとめられている。このような慎重な取り扱いがあつてこそ、この植物誌が今後の研究のための礎となり得るのである。

水草に関しても沿海の水域から高山の池沼まで含むだけあつて種数が豊富だ。ヒメバイカモの記録なども興味深い。

○『香川県自然環境保全指標策定調査研究報告書(新川水系ため池)』(香川県環境保健部環境自然保護課、昭和62年11月、94頁)

香川県における自然環境の基礎的調査研究をとおしてその現状を明らかにし、その資料をもとに将来にわたる自然環境保全のあり方を探ることを目的として、表記の調査が進められてきた。全国でも屈指のため池県である同県において、ため池の自然環境を抜きにしては香川県の自然環境は語れないということで新川水系(高松市の東にあたる)のため池がとりあげられた。貯水量5万 $\text{m}^3$ 以上のため池53ヶ所で水生植物、両生・虫類、淡水魚、

底生動物、トンボを対象にそれぞれ地元の適任者が調査にあたっておられる。

水生植物では、各池に生育していた水生植物の群落組成表と、それらの分布概況図が載っている。今回の調査対象となったのは水生植物の生育に必ずしも適当でない広大な池だったので面白くなかったとの感想が述べられているが(実際、水草らしい水草のない池がいくつもあつた)、これはこれとして将来の変化などを追跡するための貴重な資料である。水草の豊富な“小さな池”の資料が今後集積されることで、水草のよく育たない環境も含めて、ため池の自然環境というものがより深く理解できるのであろう。

OE. O. Gangstad "Freshwater Vegetation Management" (Thomas Publ., 1986, 380p.)

この本は水生雑草の防除の実際をもっぱら取り扱っている。それは著者が研究者というよりも、水生雑草問題の現場に接してきた技術者(役人?)であることにもよるのであろう。水生雑草問題の概説や主な雑草の紹介もあるが、ページの大半は具体的な防除法、特に除草剤を使った方法の解説にあてられる。どの除草剤を、いつ、どれ位の濃度で散布すればどのような効果が期待でき、環境や人間の健康にいかなる影響を与えるかにまで言及される。まさに現場への指針を提供しているわけである。これが日本の現場にそのまま通用しないことはもちろんであるが、このような本が出ることは、水生雑草管理の仕事に多くの人がかかわっているアメリカならではの感がある。(角野康郎)

○投稿のお願い

次号(6月)の原稿をお送り下さい。

原稿送り先 〒657 神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学教養部 角野康郎

締切 5月25日

10周年記念号の原稿締切は9月20日ごろの予定です。この方の準備もお願い致します。詳細は次号でお知らせします。

水草研究会会報 No.31 (1988年3月)

発行 水草研究会(神戸市灘区鶴甲1-2-1)

神戸大学教養部生物学教室内)